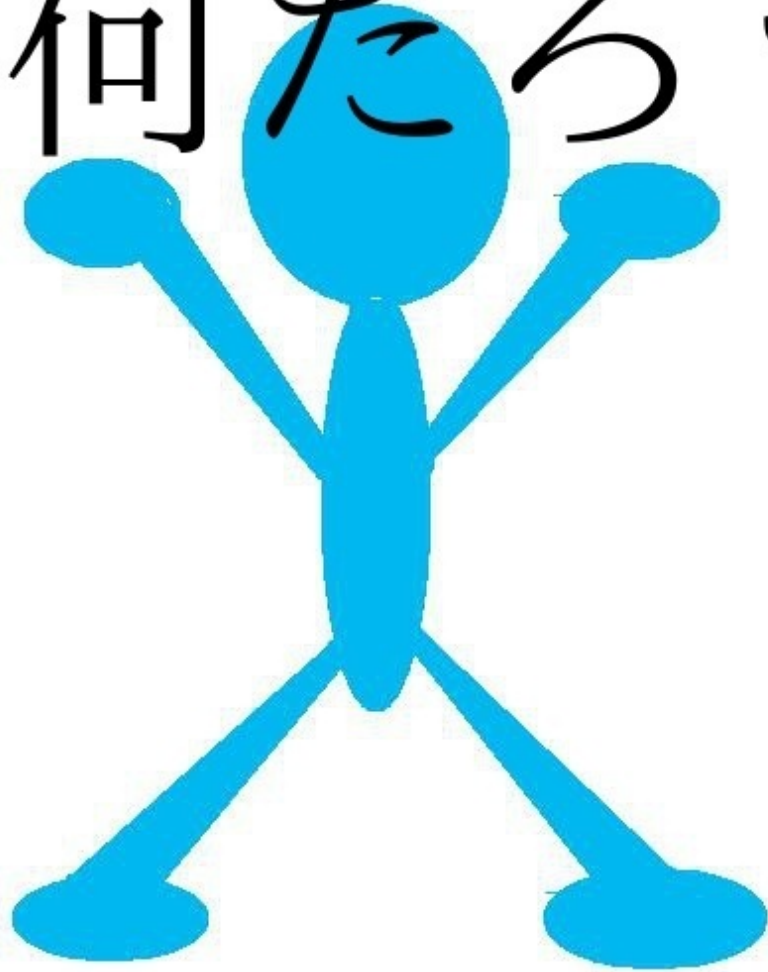


人間力って  
何だろう



hiromum



人は年を重ねるにつれて、いろんな経験も積み重なり、いろんな問題の解決策やその難易度も、それなりに見えてくるように思います。

しかし年齢では解決できないことも多くあります。僕自身も含めていい年をした大人の、モラルの低さを感じることも多いのが現実です。

H市民大学で「人間力に迫る」という講座があり、受講してみた。そして「人間力とは？」についてあらためて考えてみた。

この本は僕の受講レポートをもとに、若干加筆してまとめたものです。

読者の参考になれば幸いです。



人間力って何だろう。

解説書的な解釈をすれば、次の三つの要素を組み合わせた総合的な力とでもいえるのでしょうか。

(1) 知的能力的要素：

基礎学力、専門的な知識・ノウハウを持ち、自らそれを継続的に高めていく力、それらを応用していく論理的思考力、想像力。

(2) 社会・対人関係力的要素：

コミュニケーションの技術、リーダーシップ、公共心、規範意識や他者を尊重し切磋琢磨しながら、お互いを高め合う力。

(3) 自己制御的要素：

知的能力的要素、社会对人的要素を十分に発揮するための意欲、忍耐力や、自分らしい生き方や成功を追求する力。

「人間力」には決まった定義のようなものは無いようです。

「人間としての総合的な魅力」などと言う人もいます。

ともあれ、ここでは、人間力を高めるということは、上記の(1)と(2)そして(3)を高めるということと考えてみましょう。



卑近な例として、歩きながらタバコをすう「歩きタバコ」の場合を考えてみる。

傍若無人な人は別にしても、相当マナーに気をつけ、携帯灰皿を持ち、喫煙場所に気をつける人でも、歩きタバコの場合、後ろを歩く人が副流煙によって受動喫煙していることに気が付いていない人が多い。

つまり自分の行為（喫煙）が、後ろ（決して前ではない）を歩く他人（非喫煙者）に大きな迷惑をかけていることに気づいていない。

他人にいやな思いをさせながら、リラックスしている自分に気が付いていない。

この事例は人間力（1）が欠けているのでしょうか。

つまり喫煙の自分への影響と他人への影響を、もう少し深く掘り下げて理解しなおす知的要素にかけているのでしょうか。

喫煙者の方からは、税金も払っているのだから、大目にみてほしいという声が聞こえてきそうです。



生活道路は車も走れば、自転車も走る。当然歩く人も多い。

車を運転する人は、スピードを落とし、周囲の状況に注意し、いつでもブレーキを踏める状態でなければいけません。

その生活道路を、やたらとスピードを上げて走る車の運転者。

事故を起こせばどうなるかということを理解はしている（人間力（1）はある）だろうが、人間力（2）や（3）に欠けているのだろうか。特に自己制御が出来ないのは困ったものです。

人間力が高いとは、到底言えません。

飲酒運転の場合も、自己制御が出来ないということでは同様でしょう。



電車の中でも、人間力を連想させる出来事が多くあります。

例えば、iPodに代表されるデジタル音楽プレイヤーでの音漏れの迷惑。

音楽好きでも、あの音漏れの音は耳に入ってくると気分が悪くなってくる。

本人はイヤーホーンで聴いているから、夢中になって自分の世界に入り込んでいるから、自分の音漏れがそばの人にどれだけ迷惑をかけているかに、気づいていない。

自分の状況を客観的に理解しようとする人間力（1）に欠けているのかもしれない。

僕自身も注意されたことがあって、あまり偉そうなことは言えないが、それ以後自分からは音漏れさせないよう気を付けるようにしています。

同時に気になればうまく注意してあげることも、人間力（2）につながるのでしょうか。

ちょっとしたことですが、日常生活でよくある出来事です。

## 映画「アフリカの女王」をみて

---

映画The Afrincan Queen は1951英米合作で、第一次大戦下のドイツ領東アフリカが舞台になっています。

当時のアフリカは環境が悪く、疫病に悩まされ撮影ははかどらなかつたらしい。キャサリン・ヘップバーンとハンフリー・ボガードが好演。ヨーロッパ大国は植民地政策を広げ、このドイツ領東アフリカ（今で言うところのあたりになるのか？）にもドイツ軍がきて……。結局宣教師として布教に来ていたイギリス人ローズ（ヘップバーン）の兄がドイツ軍に殺され、ローズはドイツに敵意を抱くようになる。チャールズ（ボガード）と彼のオンボロ蒸気船で川を下って沿岸に出て、ドイツ軍の船を爆破しようという計画だったが、途中紆余曲折、その間二人の心理は複雑に変化していく。

この辺が映画の見所なのかも知れない。

人間は一人では生きられないし、二人になれば相手のことも思いやらねばならなくなる。

「仁」という字は人が二人を意味する。仁は思いやりであると孔子は知っているし、それが人間力であるともいえます。この映画は、僻地の布教活動から始まって、急流を下りながら、さまざまな経験を得ながら、次第に人間力を高めていく過程を描いているとも解釈できます。

## プレゼンカ

---

プレゼンテーションの上手な人とは。例えばあの人の話はよくわかるとか、説得力があるとかいわれます。ある種のコミュニケーション力なのか。熱意や情熱の表現なのか。リーダーシップに関連することなのか。話を聞いた後で、なんとなく納得し、共感を覚え、その気になったとすれば、その話し手はプレゼンテーションの上手な人なのでしょう。

IT業界でいえば、アップルのスティーブジョブ氏やソフトバンクの孫正義氏のプレゼンの上手さは万人が認めるところですが、その孫社長が、民主党の会合で「震災復興に向けて」と題した講演を行っているのをUSTREAMでみる機会があった。・・・・それは静かな現状認識から始まった。

原発の占める割合から世界の原発の発電量、実はピークは1980年代に終わっていて現状を維持しようとするバンバンと新しい原発を作り続けなければならない。それは世界的にみると平均22年で廃炉になること。40年以上使用する例は珍しいこと。さらに原発のコストは安いという古い数字があるが、実際はコスト高であることなどプレゼン資料をもとにたんたんと、しかし熱意をこめて話は進む。

孫氏のプレゼンの上手さは、その独特の口調にもよるが、大きな視野から見て作成されている、わかりやすい資料によるところが大きい。資料を見ながら話を聞いていると、たいていは話の流れに乗ってしまう。世界の原発による発電量の推移のグラフを見ると、以後原発を積極的に新設していく意味はもはや無いという気になってくる。

最後に新規提案に入っていきます。これが無いと単なる話で終わってしまいます。孫氏自身やソフトバンクとしての被災者支援体制から始まって、新エネルギー産業を東北から始めるという壮大な提案を資料を使って説明していきます。

古いタイプの政治家は、聞き心地のよい言葉を並べて回りくどく、これでもかこれでもかと話します。今流のプレゼンカのある人は直接的な言葉で、わかりやすい資料を使って目と耳から明快に迫ります。当然後者の説得力に軍杯は上がるでしょう。

孫氏の高いプレゼンカは、写真やグラフや数値を用いたわかりやすい資料と、メリハリのきいた話口調、そして時には自分の思いをぶつける情熱によるものなのでしょう。それが聞く人の気持ちをとらえるのでしょう。

プレゼンカ（ある種のコミュニケーション力ともいえる）は、人間力の構成要素の一つだと思います。リーダーに必要な大きな要素でもあります。人間力のある政治家、プレゼンカのあるリーダーの出現が今最も期待されているのでしょう。



## 政治家にみる人間力

---

ここ数年間政治の世界を垣間見るに、人間力の高い政治家はいるのだろうか、と思ってしまう。次々と変わる総理の座。

感動を与えるような演説が出来る政治家に出会わない不幸。

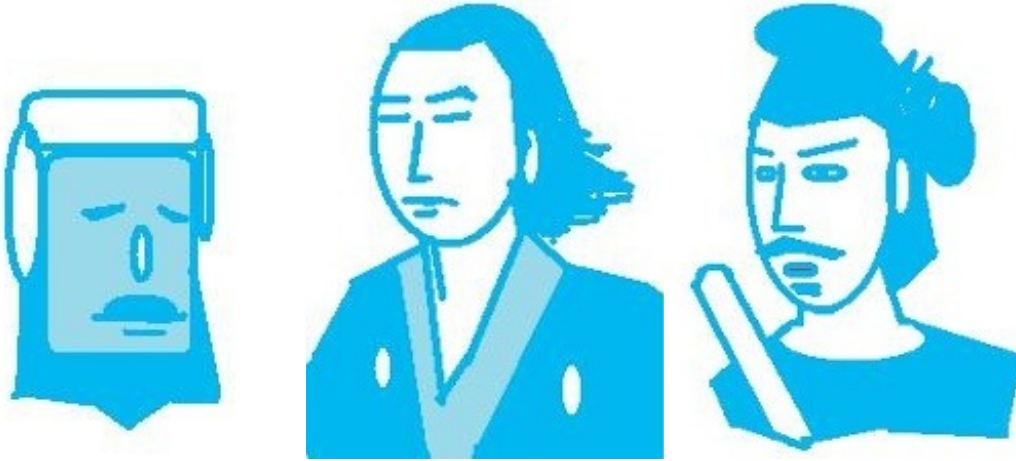
政治家こそ、高い人間力が必要とされるのではないのでしょうか。

最近バランスのとれた人間力を持ち合わせた政治家に、出会ったことがないような気がします。人間力の高い政治家が、全力をふるって道を示し、情報発信すれば、国民の広い支持を得られるはずだ。

こんな混沌とした世の中ではあるが、それ故に可能な気がします。

国民は、そんな政治家を待ち望んでいるはずです。

ヒトラーのような演説は、結果的に国民を誤った道に誘導してしまう危険性はありますが・・・。



例えば、孔子や聖徳太子は、人間力が高かったのでしょうか。

歴史的事実や、逸話の記録を見る限り、かなり人間力が高い人だったのでしょうか。

「論語」や「十七条憲法」などから、かなりの人間力を想像してしまいます。

しかし最初からそうであったのではなく、たぶん他人の話を聴き、自分で考え行動していく間に、失敗を重ね学ぶことにより人間力（１）（２）（３）を高めていったのでしょうか。

坂本龍馬の例を見ても、彼は書物から知識を得るのは必ずしも得意ではなかったようですが、知識人から話を聴き自分の人間力（１）を高めていった様です。独特のコミュニケーション力(人間力（２））を持っていたようですが、実行しようとする強い意欲（人間力（３））も持ち合わせていたようです。

もちろん潜在的な能力のせいでもあるでしょうが、周りの人達から、あるいは環境からどんどん吸収して自分を成長させていったのでしょうか。

他にも歴史上には、人間力の高い人達は沢山います。

良いところだけが伝えられ、どんどん伝説的になっていったのかも知れません。

## 結局「人間力とは」

---

人の命や価値に高低や軽重は無い。みんな平等だ・・・とはいっても、人はそれぞれ異なった能力を持っているし、能力の差は確かにあります。

人間力とは、そのような能力の組み合わせであり、簡単な言葉でいえば、（１）知力 （２）対人力 （３）自己制御力 を併せ持った「前向きに生きるための総合力」ということでしょう。

（この本ではそう考えます。）

最近人間力という言葉をよく聞きます。でもなんだか漠然としていて、いまひとつはっきりしないことが多いようです。

最初に人間力を三つの要素で表現しましたが、もっと広い意味で使われる場合もあるようです。

人間力という限り、いわゆる経済力や権力をも超えた力であると考えたいものです。

そして人の一生とは、結局その人の「人間力」を高めるプロセス（工程）と言えるのではないのでしょうか。



高齢化社会と言われる現在です。

生きる時間は平均的に伸びています。

年を重ねるに従って、体力は低下するのは否めません。

しかし人間力は年を重ねるに従って、高めていけるのではないだろうか。

年を重ねるに従って、人間力のレベルを上げていきたい。

僕自身もぜひそうありたいと願っています。

この本が幅広い年代の人に読まれ、読んだ方が、一生をかけて「人間力」を高めていきたいという気持ちを持って頂けたとしたら嬉しい限りです。

(Feb.23,2011 HM記)

2011/03/03 : 「まえがき」の書き出し部を若干修正しました。

2011/03/11 : 映画「アフリカの女王」をみて、を追加しました。

2011/04/26 : 「プレゼンカ」を追加しました。